フェニックス鈴木

西川政一

アノ日、アノ時、忘れんとして忘れ得ないあの最後の鈴木蹉跌の報！それから五十年、思えば春風秋雨の変転極りなき半世紀であり、鈴木の残党が「回顧五十年」の夢を強調し、夢よも一度と絶叫するのも無理からぬことでした。竹下富士松君ならずとも『あゝあの日から五十年、祖国の山河かわらねど、変る祖国の人の世や、人の情はうすれゆく（中略）、うけつぐ鈴木の精神は、いわず語らず（中略）、歴史に語れ五十年』（たつみ誌26号）と唱い度くなるでしょう。

関係各位、特に本部幹事諸君の数次に亘る準備会合のおかげで、洵に感慨深い全国合同大会――蛍ケ池畔の京都国際会館で語り合った二百名余の意義深き会合――すべてが誠に立派に運ばれて、参加されなかった方々が少なくなかったことが惜しまれてならなかったのでした。今、私は静かに思うのです。我々はここでたゞ徒らに回顧の夢を追い「懐かしさ」と「思い出」にふけるのみではいけない、どうすれば、この回顧を生命あるもの、そして次の時代を朗らかで溌剌たるものに済し得るか…真剣に考え、考え、考え抜かねばならぬと思うのです。お互いにわれ〳〵のみでは出来ぬことは、過去の貴重な経験を生かし、二世又三世の人々の、燃えるような若い力を加えて、輝かしい将来を築き上げ度いものです。絶対に「一将功成って万骨枯る」の愚を繰り返してはならぬと強く強く思うのです。「回顧五十年」のこの秋にして……。

＊　＊　＊

今度の大会では、地元で山川常七さんを始めとして藤本光城さん、安岡重明さん、桂芳男さん、来住邦男さん、沢木三樹臣さんなど遠路わざ〳〵御参加下され、大会に花を添え、その盛り上りに大きな寄与をして頂いたこと、会員一同の感激に堪えない所であります。

さるにても最近日本経済新聞社が「日本の財閥」誌で安岡重明氏の責任編集の下に寺谷武明氏、宇田川勝氏、森川英正氏、桂芳男氏、三島康雄氏、栂井義雄氏、又、東洋経済新報社が宮本又次氏、栂井義雄氏、三島康雄氏等を夫々動員して『日本の財閥』や『綜合商社の経営史』などを通じ深くメスを入れ、昭和金融恐慌の経緯などにも学究的な研究態度を進めて、広く世に鈴木商店興亡の姿をマザ〳〵と明らかにされつつあることは、その読者と共に喜ぶべき現象であろうと思います。他方鈴木商店と発祥地を一にして居る神戸新聞社が「海鳴りやまず」の題名の下に、神戸経済人の世紀について祥報せられ、又神戸市主催の産業歴史展の開催も鈴木商店とは縁深きことと信じます。

最後に私はこんどの紀念全国大会に「神戸より倫敦へ」と題する冊子を参会者一同に贈呈申上げたことを附言、温故知新の一助にもと存じて居ります。

（一九七七―六―一五）

還らざる河

小野三郎

去る五月鈴木商店の回顧を記念とした全国大会が豪壮な国立京都国際会館に於いて盛大に催され諸兄にも悲喜交々の感激を回想されたことと御推察申上げます。野生この日の出席を待ち佗び愉しんでいたのにもかかわらずやむを得ざる事情の為折角

の御慧眼にもまみえず千載一遇の好機を逸しましたこと今尚残念に思っております。唯今本部から御送り頂いた当日の会場写真をつくづく眺めては独り感慨無量に胸が堪えられません。

この度編集子の方からこの記念号に是非執筆せよとの御依頼がありましたので雑文ではありますが海鳴りやまずの資料の一部、運命の日の感想を述べ文責を果たさせて頂きます。

「鈴木がつぶれるかもしれん」この事は国内の社員にあるていど推測はできた。新聞記事、それに金策にかけずり廻わる幹部の動きを見ても、ただならぬ情勢が読める。だが、海外の支店員はどうだったか、四月四日、本社が打った「支払停止」の電報を受け取って各支店ともショックに声も出なかった。事情にうといからではない。三井を追い抜いた鈴木の実力から破綻は想像も出来なかったのだ。

倫敦支店の整理担当小野三郎もその一人、支店長の高畑誠一氏を大正十五年本店に送り出したあとは事実上の支店の番頭格、高畑氏から「本社の経理がよくない」と聞かされてはいたが…電報を読んで「まさか、何かの間違いだろう」と思った。砂糖の三国間貿易を手がけ、鋼材の輸出入、ヨーロッパでの新技術の導入（クロード式窒素）など、高畑氏ら若い感覚で商圏を拡げた倫敦支店である。イギリス人七十人を雇って、力を示す若き猛者達にどう説明すればよいのか、さま〳〵な思いが去来する。

「それはよき時代でしたよ。高畑さんから、ゴルフをやれば五年は長生きする、とすすめられましてネ、ホテル生活でしたが、朝五時に起きてフロに入り、それから出社、業績がよいから倫敦の街を歩きましたよ」と小野は回想する。その誇り高き鈴木マンが一夜にしてどん底へ、折り返し本社へ真相を問い返してみたが、破綻の事実ははっきりした。大使館の松山財務官が来まして、「日本人の会社が店を閉じた時に不義をしては、恥を晒すことになる。始末だけはきっちりするように、と言われて、はじめて残務整理をする気になりました」支店は五階にあった。早速銀行から係員がやって来て応接間の家具、事務机まで赤紙をベタベタ、その係員が玄関で見張りをしているので、書類を整理するのもままならなかった。続いて本社から電報「商権は三井、三菱に譲るよう」と云う内容、昨日までシノギをけずったライバルに商権を明け渡すということだ。耐えられないが、涙を耐えて残務整理を一つ一つ片付けた。

ある日松方幸次郎さんが支店にやって来た。私にいわれるのに「君ら対策は皆で相談しているだろうが、決して金子をうらむでないよ、懸命に働いて敗れた結果についてとやかくいってもはじまらないからナ」。この言葉はズンンと脳底にこたえた。絵画を買い漁る大尽と人はカゲ口をたたいたが、造船の情報集めに腐心する松方を、われらは知っていた。川崎造船は倫敦に支店を持たなかったので、鈴木を足場にしていた。その川崎造船がわが鈴木に似たような情勢にある。自分に言い含めるように語る松方さんの苦悩が、帰国してわかった。同僚の宮口俊二郎君に相談していった。「再起を期してけじめだけはつけよう」と、不眠不休で取引先を訪れて頭を下げた。砂糖商ザアニコウ商会、鋼材業、キャメルン商会など有力関係筋は一様に「こんごも接触していこう」と約束してくれた。

「日本人はオネスト（正直）である」というのが商売をしていく上の第一条件でしたから信用回復にみな努力を吝みませなんだ。

後年日商で再スタートしたとき、各国でこの信用を博したのも根強いこの足跡の御蔭である。赴任するときはいと華やかに神戸港から一等船室に乗り込み、派手な歓送を享けた身が有為変々とは云え涙の帰国の際は二等船室の粗末なベッドに横わっていた。

午後の日ざしに紫陽花もの憂き影（編）

洛北宝池
半世紀回顧大会所感

鈴木丸衛

五月十二日(木)、快晴、正午前、洛北宝池の会場に到着。本日の会場は、国立京都国際会館であり、世界に名高い、紐育の国連ビルや、ジュネーブのパレ・デ・ナシオンに匹敵するといわれる丈あって、合掌造りの見事なる建物である。本日の大会は、半世紀回顧大会と銘打っての会合のため、全国から馳参じた辰巳会々員と同伴者は二百名を超える盛会となった。旧知の諸君と再会を喜び合い、旧交を暖めることが出来て、洵に欣快の至りであった。会場には、九十一才を迎えた、高畑誠一、永井幸太郎の両先輩も元気に御出席、会衆の拍手を受けられた。又宴会場には、大原女のサービス嬢十数名が、独特の扮装でサービスに当り、京都気分を盛り上げた。

宴を閉じ、記念撮影の後、散会したのは午後三時過ぎであった。

光陰矢の如し。鈴木商店が、昭和二年四月、解散してから、なんと五十年を迎えたのである。十年一昔といわれるが、実に半世紀である。昔は人生五十年と言われた時代もあった。五十年の星霜を経た今日、鈴木商店の同窓会的存在たる辰巳会が、今尚脈々として、生き続けているのは、正に世紀の奇蹟でなかろうか。なぜだろうか。彼是考えているうちに、フト、「積善三家必有餘慶」という格言に想い当った。これあるかなと思ったのである。鈴木商店は、日本の産業の改善発達に、又貿易の振興に数々の貢献をした。つまり、積善の家に外ならなかったのである。今試にその数例を挙げて見よう。

第一にあげたいのは、「日米船鉄交換」である。第一次欧州戦争（大正四年～七年）に際し、英米はその自衛上、鉄材の輸出禁止を断行した。慌てたのは、その輸出に依存して居った日本を含む諸国の鉄工業者であった。日本では国を挙げてその対策に狂奔し、外務省を始め政府機関が総力をあげて、対米説得を続けたが何の効果も得られなかった。この時に当り、民間の解禁対策委員長として、鈴木商店の金子直吉さんが、時の駐日米国大使、ローランド・モリス氏と接触「船鉄交換」という奇想天外の提案を示し、迂余曲折の後、見事に交渉妥結に至らしめたのであるが、その内容は米国の解禁鉄材数量の三分の二は船を造ってお返しをしようというのであった。金子さんの奇才、否鬼才が、日本の危機を救ったのである。鈴木商店が米騒動で焼打の悲運にあった大正七年の春、この日米交渉妥結の吉報が神戸に伝わるや、諏訪山公園で祝賀の花火が盛大に打揚げられたのを覚えている。

神戸には川崎、三菱の両造船所、神戸製鋼所等あり、皆蘇生の想をしたのであろう。独り神戸のみならず、日本の鉄工業者総ての喜びの花火であったことと思う。日本の運命は正にこれによって開かれたのである。

第二の例は、人造絹糸産業の創立である。大正の初期、日本国内では、米沢高等工業学校の研究室で、秦逸三教授が人造絹糸の研究をして居った程度であったのを、金子さんが、東レザーの技師長久村清太氏を右研究に合流させ、研究費を出して、諸外国の人造絹糸産業の実情を調査させ、遂に帝国人造絹糸株式会社の創立を見るに至ったのである。之が現在の「帝人」の前身である。

第三の例は、クロード式窒素工業株式会社の創立である。第一次欧州戦争終了直後、巴里のエアー・リクイド社のクロード技師長が空中窒素固定に成功せるニュースが世間に伝わるや、

逸早くその特許を、ロンドンの高畑支店長の尽力により鈴木商店が買収し、前記の会社を創立し、彦島に工場を建て、右特許によりアンモニヤを造り硫安を生産して居ったが、鈴木商店の解散後は、三井の手に渡り、東洋高圧により事業を引継がれたことは周知の通りである。

第四の例は、油脂産品への貢献である。第一次欧州戦争当時、鈴木商店は、縦横無尽に活躍して大儲けをしたが（西川政一さんの「神戸より倫敦へ」御参照）その金をどうしたかといえば、その大半は油脂工業の発展のため使ったようである。即ち、大連、兵庫、鳴尾、清水、程ケ谷及王子の六工場を買収又は建設して運営したのであるが、そのうち兵庫魚油工場では、硬化油の製造に乗り出したのである。私は大正六年鈴木商店に入社し、樟脳部に勤務して居ったが、主任の楠瀬正一さんが、硬化油本部の部長を兼任して居ったので、同部と机を並べて居ったため、硬化油本部の業績の進展ぶりを、眼のあたりに承知して居ったのである。兵庫魚油工場に隣接して、フランス系の酸素製造会社があり、造船所や製鋼所等へ酸素を供給して居ったが、酸素は水を分解して造るので、副産物として水素が出るのを鈴木商店は、之を買収し、之を以て魚油を処理して、液状の魚油を硬化油、即ち石鹸様の固体とするのである。之は同工場の主任の久保田四郎工学士の、海外調査研究の結果であった。その技術は更に進んで、固体が粉状となり、〝HARDENED FISH OIL IN POWDER〟として輸出しようとしたが、運賃が重量屯でなく、容積屯で取られることが分かり、引合わぬこととなって粉状硬化油の輸出は遂に立消えになったようである。

魚油工場の一例をあげたが、他の大豆油諸工場でも、大正十一年頃には、一日千屯内外の大豆をつぶして、製油と製肥業をやっていたものもあり、夫々顕著なる功績をあげて居ったのである。

第五の例をあげれば、化学工業に欠くべからざる工業塩の生産がある。直系の大日本塩業株式会社（日塩の前身）により関東州大連を拠点に、附近のヒシカ、普蘭店、五島、双島湾に、六千町歩を超える広大な地域に、天日製塩場を造成し、海水を汲み上げて、陽光と風を利用して、年産三十五万屯以上もの、天日塩の生産をあげて居ったのである。

以上、試みに五例の「善行」をあげたが、鈴木商店はまさしく「積善之家」に外ならぬことが明かである。将来「辰巳会」の名が消えることがあろうとも、鈴木商店の日本産業の進歩発展、貿易の振興に竭した偉大なる功績は、歴史と共に永遠に残ることと信ずるものである。

半世紀の回顧

宇津木亥一

五月十二日に京都国際会館に弐百余名集り回顧五十年記念大会が催された。曇り空ではあったが本会は実に有意義であった。いつもの様に皆は笑わない。お喋りも余りせぬ。大会が終末に近づき竹下錦光夫人が演壇に立って『老人いまなほ矍鑠として此の処に集る、その心中を誰が知らう、窓外緑間に鐘声を聞きつつ沈思する』という意味の詩吟が朗々と聴えて来たとき、涙がどっと溢れ湧き止めようもなかった。列席の誰も彼もが踏越えて来た幾山河の五十年の歳月に対する回顧が或は夢の如く或は暴風雨の如く胸裡を衝き走ったことであろう。この詩吟は圧巻であった。

私にとっては鈴木スラバヤは第二の故郷であった。青春四ケ年の勤務を終って、これから内地の生活に入ろうと楽しんで帰朝した其の春が昭和二年四月である。夢想もしなかった大事態